

## エッセイ

## 小特集「パンデミックに思うこと」

二〇二〇年が明けた当初、このような事態が起こることを誰が予測できただろう。

一月九日に中国政府が新型コロナウィルス検出を発表し、二月に日本で初めて感染による死者が確認されてもなお、私たちの日常はまだ安穩としていた。しかし、感染症の猛威が三月末までにはアジア、ヨーロッパ、アメリカを席卷し、八月現在ほぼ全世界の諸地域へと拡大を続けている。政治・経済・文化の多方面にわたるネットワークがウィルスの「グローバル」な移動を可能にする一方、国境が次々と封鎖され、ヒトの移動が制限されたのは皮肉な展開といえない。

日文研でも四月初旬から在宅勤務制度が実施され、当面の主催行事・イベントの相次ぐ中止・延期が決定された。教職員の海外への出張はおろか、国内の移動も一時は禁止となった。それ以上に深刻なのは、日文研の使命の一つである海外の日本研究者への支援と交流事業に大きな支障が出たことである。滞在中だった外国人・外来研究員の何名かは、任期を残しながら早期帰国を余儀なくされ、逆に帰国予定だった人びとは日本に足止めされた。新年度に着任が決まっていた研究者の渡航計画も軒並み変更となっている。

私たちの日常は大きく変わった。通勤時や職場ではマスク着用が半ば義務づけられ、他人との間に「社会的距離」を取ることが新たなマナーとなった。会議や研究会、セミナー、授業は

いづれも、ビデオ通話等の遠隔的な通信手段に頼らざるを得ない。視線を合わせた対話が叶わず、相手の表情に真意を汲み取ったり、その場の声に耳を傾けたりといった、ふだんの触れ合いが当たり前のものではなくなつた。人間の文化的な営みが著しく阻害された状況といえる。

今、ウィルスと共生する日々のなかで、個々の記憶を言葉として残したいと考え、小特集を企画した。幸い、予想以上に多くの方がたが自発的に文章を寄せてくださった。それぞれに困難を抱えながら、それでも、発想を前向きに転換させるためのヒントがそこには隠れている。

白石 恵理（国際日本文化研究センター助教）